

中国の農村と日本の農村

自然を加工することが
苦手だった日本人

菅豊

日本と日本の伝統農村

日本と中国は、古くより深いつながりを有し、多くの面で類似点、共通点をもっている。とくに、モンスーンの影響を受ける湿潤な中国沿海部の伝統農村は、日本のそれとそっくりである。村の景観はもとより、住んでいる人々の外貌、水稲耕作を中心とする生産様式など様々な点において似ているのである。ところが、ことに自然を利用する、管理するといった、人間が自然と具体的につきあう局面になると、日本と中国とはかなり大きな違いを示している。

最近、以前の日本、とくに近世の日本社会が、循環型社会であった、と語られる。人糞を肥料として用いる習慣のないヨーロッパなどでは、18世紀まで

は糞尿が道路や河川にうち捨てられていた。しかし、日本ではその人糞尿を捨てるどころか、有効に肥料として用いることによって、農業の生産性を高めていた。江戸など都市部の人糞が、近郊農村で肥やしとなり、それで育てられた蔬菜類が都市部の人々の食卓に上るといふサイクルは、あまりにも有名である。ところが、お隣中国には、もともと日本の上をいく精緻なエネルギー・栄養分の循環利用システムが存在していた。

自然資源を利用するシステムの複合度

中国では、人糞尿はもとより家畜の糞尿も肥料として用いていた。そして、老廃物のみならず、生産

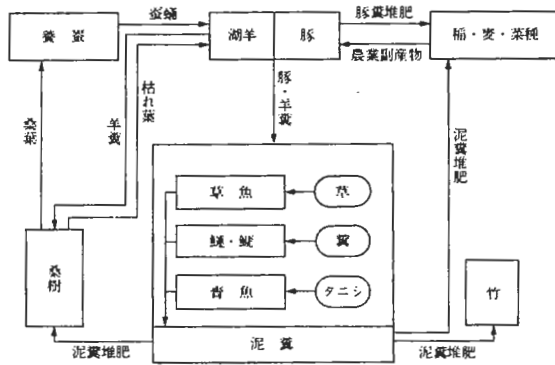
物も連結する複雑な利用系がそこにはあった。たとえば、中国・江南地方では、日本と同じように、稲作を中心とする農業が基本的な生産活動である。ここでは、農業生産物の残渣をブタの餌として、そのブタの糞を水田や畑の肥料とするとともに、養魚場の餌として用いている。魚はそれを食べて肥えたり、魚の糞が積もり溜まった池の泥土は、やはり水田や畑、桑畑の肥料となる。桑畑で育った桑の葉は当然

カイコの餌となるが、残ったものはヒツジの餌になる。そして、マユを採った後のカイコのサナギも、ヒツジの餌となり、ヒツジの糞は桑畑や水田、畑の肥料となつて……。このような複雑な生産物と老廃物の利用の連鎖が、果てしなく続く。このフロア・システムは、明の末から清の初頭(17世紀初頭)には既に完成していたようで、その時代の農書には、統合的に資源を利用するシステムのやり方がこと細かく書かれている。このように、自然資源を使い回す能力からいえば、日本人よりも中国人の方が一枚上手であったようである。

自然の改造する志向性

より効率のよい自然資源利用システムを構築するために不可欠なものとして、中国では家畜が用いられているが、この家畜もまた、日本人と中国人とが自然とつきあう際の、態度の違いを知ることのできる素材となる。

自然界の動物を、自分たちの生活に役立つようなその性質を変化させ、人間の管理下に置いた動物が家畜である。人間は、ウシ、ブタなどの哺乳類やニワトリなどの鳥類、コイなどの魚類、カイコといった



中国・太湖沿岸の複合的な自然資源利用システム (引用は馬孝勃、1989年、「中国古代の農牧結合のすぐれた伝統」(『中国農業の伝統と現代』、農文協)から)。

昆虫類など多くの動物たちを家畜化し、さらに品種改良してきた。中国は、世界有数の家畜生産国（ブタの飼育頭数は世界第一位）であり、また、多様な品種を発明し保持してきた。その飼育の歴史は相当に古く、6世紀に中国で記された総合農学書『齊民要術』には、早くもほとんどの家畜飼育法が詳らかにされている。

翻って日本は、動物を家畜として利用することは、歴史的に見て、それほど得意ではなかった、あるいは積極的ではなかったようである。ただ唯一、ウズラだけが日本で家畜化されたが、他の家畜はすべて外来で、その飼育頭数もほんの百年前までは、中国に比べて僅かなものであった。日本では神道という宗教の問題もあり、江戸時代までは、あまり肉食が盛んでなかったから、致し方がないところであろう。どうやら、日本は中国に比べて、そういう動物＝自然の存在というものを人間の力で加工したり、改造しようという意欲に欠けているようである。

自然資源利用の社会制度の相違

一方、日本の伝統農村は中国伝統農村に比べ、自然を利用し管理するための社会制度を高度に発展さ

農村の間に生じたかという点、それは資本主義の発達の場合に、大きな差があったためである。

中国は、相当古い時代に、現在いうところの資本主義に連なる経済が農村社会に浸透し、それを支える技術が発達した。そして、その技術によって自然をどんどん開発し、資源を掘り起こしてきた。しかし、土地や資源は限定的であるのに対し人口は増大すると、外側への開発の拡大は限界を迎える。余剰地と余剰資源が無くなるのである。そのため、人々は既にある限られた空間と資源を使って、より効率よく生産を上げる、という内側への精緻化へと方向転換をする。こういう内側に向かう発展はインボリューション（involution）と呼ばれ、東南アジアなど労働集約的な農業を営む地域に同様に見受けられる。

一方、日本は今でこそ世界有数の資本主義国家ではあるが、中国に比べて資本主義発展の歴史的深度と、その制度に対する適応性を有していない。さらに、インボリューションの段階に到達しないですんでいる。そのため、日本人は、徹底的に自然資源を使い回すことができず、また、自然を徹底して改良することができなかったのである。そして、その社会制度は、これまた徹底した個人主義をベースとし

せてきた。それは、入会と呼ばれる、山間部では共有林利用、河川、湖沼、海浜部では漁業権に関して複雑なシステムが構成されている。それは、基本的に共同所有、共同管理、共同使用の制度であり、村のみんなが協力しあい、また時に牽制しあうという、人間のつながりをベースにした伝統的社会システムであった。

ところが、中国ではこのような村を基盤とした自然的自然資源利用は、社会主義化されるまで、ほとんど発達していない。もちろん、族田といって同族で共同所有する水田は頻繁に見られたが、これは共同所有でも、突き詰めていけば、同族という血縁に保証された私的な制度であり、血のつながらない他人と協力して、自然資源を一緒に使い、維持していくという方向性とは全く異なる。中国の自然利用は、かなりの程度、競争的な個人主義的世界で展開されていたのであり、日本の自然利用のような共同で相互扶助的な世界は広がっていなかったといえる。

日中の自然とのつきあい方の違いはどうして起こったか

さて、何故、このような違いが、日本と中国との

た競争的なものではなく、周りの人々と協調する——ときには束縛になるが——ことを大事とする社会システムとなった。この状況を一言でいえば、かつて日本は中国に比べて、資本主義という観点において「遅れていた」ということになる。

このように書くと、多くの日本人がかつての日本に対し自信を失うかもしれないが、しかし、この「遅れた」状況を、われわれは恥ずかしがる必要はない。むしろ「遅れた」おかげで、日本の農村には未だ多くの自然が残っているし、また、その自然を守る共的な仕組みを伝えているのである。日本の伝統農村に伝えられる自然とのつきあい方は、あくまで「一周遅れのトップランナー」ではあるが、しかし、資本主義、そしてそれが背後で支えた近代技術があまりにも行き過ぎたこの21世紀において、「進歩」という名の下に壊されてきた大事なものを再生するための、大なる方策となる可能性を秘めているのである。

すが・ゆたか

1963年生まれ。東京大学東洋文化研究所助教授 民俗学・博士（文学）。国立歴史民俗博物館助手、北海道大学文学部助教授を経て、99年より現職。著書に「現代民俗学の視点」（分担執筆、朝倉書店、1998）他。

「環境会議」はお陰様で新創刊2年目を迎えました。当社の雑誌はこれまでビジネス領域の雑誌が中心で、読者の方の大半は企業人や組織に属する方でしたが、「環境会議」を通じて教育者、活動する主婦・学生の方々など、生活の担い手である皆さんに直接的に接する機会を得るようになり、たいへん刺激を受けています。この方達こそが環境を実践する現場のプレイヤーであり、自分の周辺を考えることで、社会のこと、ひいては地球のことまでも考えを広げていこうという志を持っておられます。良い活動、素晴らしい視点がまだまだ知られていないという現実、ここを私も編集部では、メディアの役割として一人でも多くの方に伝えていきたいと考えています。また、環境を大切なテーマとしてとらえ、

さらに大きな流れを出していくには、あらゆる人のパートナーシップ、コミュニケーションが必要だと感じます。読者の皆様からの、さらなるご意見、ご感想をお待ちしています。先日、環境省広報室が声をかけてくださり環境省がどんなテーマで動いていこうとしているか、審議官と広報室長が直接その方向性をお話くださいました。環境に関する情報発信や交流も、新しいかたちで実施しているところと積極的かつ意欲的で、メディアの立場からもたいへん嬉しく思いました。国土交通省河川局の方も、地域や活動する人々との交流に力を注いでいます。行政としての新しいコミュニケーションの実践が始まっており、私どもは宣伝広報50年の歴史を活かし、ここにも協力していきたいと考えています。

予告

人間会議夏号は 2004年6月5日
環境会議秋号は 2004年9月5日
に発売予定です。

■人間会議・夏号
現代人は何を学ぶべきか
特集 美しい日本をつくる—地球地域学
・和辻哲郎「風土」に学ぶ日本の文化
・地域に賢人あり。
地域の賢者を教育に活かす。
・土地が持つ知性

哲学者たちのものの見方
仏教の真髄
戦後を復興させたジャーナリストたち
世の中をつくった実務家の思想 ほか

■環境会議・秋号
特集 環境で地域づくり、町づくり
新しいエネルギーの研究と導入は
どこまで進んでいるのか
環境から考える食の安全
日本人と山川海
生態系が変化している!? など

地球温暖化対策
増税ではなく、
私たちの知恵

郵便はがき

107-8790

料金受取人払
赤坂局承認
2487

(受取人)
東京都港区南青山3-13-16
株式会社 宣伝会議
「人間会議」「環境会議」定期購読係行

差出有効期間
平成17年6月
4日まで
(切手不要)



「人間会議」「環境会議」へのご意見・ご感想

環境会議 2004年春号 2004年3月5日発行 年2回刊

編集室長 福山健一	●発行所 株式会社宣伝会議
編集長 田中里沙	東京本社 〒107-0062 東京都港区南青山3-13-16
発行人 東 英弥	☎03-3475-3030 (大代表)
表紙題字 木下勝弘	北海道本部 〒060-0042 札幌市中央区大通西5-11-1
表紙デザイン 山口聰 (凸版印刷TANC)	☎011-222-6000 (代表)
本文デザイン 凸版印刷TANC	中部本部 〒460-0003 名古屋市中区錦3-4-13
	☎052-961-0311 (代表)
	関西本部 〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-8
	☎06-6347-8900 (代表)
	九州本部 〒810-0041 福岡市中央区大名2-4-19
	☎092-731-3130 (代表)
●読者の皆様からの人間会議に対するご意見、情報を 受け付けております。情報はメールにてお寄せ下さい。 e-mail: kankyo@sendenkaigi.co.jp	●印刷 凸版印刷株式会社
●購読のお申込みお問合せ 販売部 ☎03-3475-3031	◎宣伝会議 本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
●掲載記事に関するお問合せ 編集部 ☎03-3475-3033	
●広告掲載のお問合せお申込み 広告部 ☎03-3475-3042	

株式会社宣伝会議 ホームページは <http://www.sendenkaigi.com>

乱丁落丁の場合はお取り替えいたします。
当社販売部またはお買い求めの書店までお申し出ください。

明日を、今から
石油
www.pa